

ぶらすα

No. 99
2014・秋

すべてを「ええよう」（良いよう）
に受け取る

出居清太郎ワールドへのご招待 4

人としての重さ

(1) 心が濁って曇っておれば、見たり聞いたりのすべてが思い違い、勘違いとなつて、おのずから迷いの渦中に入っていくことになる。

(4) 人の重さは体重によって定まるのではない。徳の大小がその人の真正味の重さを決める。

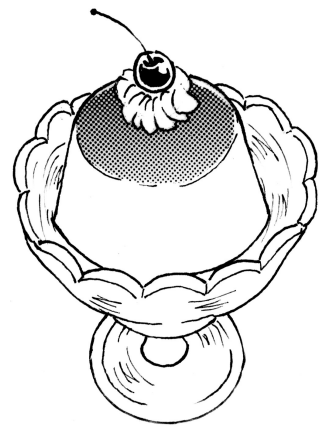
(2) 見ること聞くこと、すべて「ええよう」（良いよう）に受け取っていく。これがまごころである。

(5) およそ十年あまり、鏡を見て微笑をたたえる勉強に励んだ。そのうちに、いつでも、どのような場合でも、微笑を失わぬようになれた。

(1) カメラのレンズが曇っておれば正しい映像をむすばない。同じように心が濁って曇っておれば、見たり聞いたりのすべてが思い違い、勘違いとなつて、おのずから迷いの渦中に入っていくことになる。「心を浄化なさい」「魂をみがきなさい」と、口をすっぱくして教えているのはこの故である。

カメラのレンズが曇っていたり、メガネが曇っていたらきちんと見えないというのはその通りですね。人のことを「色メガネで見る」という言い方もあります。あの人は意地悪な人だという先入観を持っていると（つまりそういう色メガネをかけていると）、その人が親切な言葉をかけてくれても、何か裏があるにちがいないと邪推してしまいます。

逆に「あばたもえくぼ」という言葉もあつて、好意をもっている人の言動は、間違つたことで



カット 齋藤啓子

あつても見逃してしまうことがあります。

グラスで水を汲むとします。赤いグラスでくめば赤い水のように見えます。青いグラスでくめば青い水と見えます。これは色付きグラスでくんだから、水の正しい姿が見えていない。そこで透明なグラスで水を汲みました。すると水には色はついていませんでした。ところがその水は濁っていました。

この場合、私たちは、この水は色はついてな

いけれども、濁った水だと判断します。ところがもし、水をくんだガラスの底に、もともと土やゴミが入っていたとしたらどうでしょう。いかに清らかな水でも、濁り水と見えてしまいません。

「水は方円の器（うつわ）にしたがう」という言葉があります。これになぞらえていえば、「水は清濁（せいだく）の器にしたがう」ということです。

私たちは人のことを評価したり判断したりしますが、それは結局、私の心の器でくみとった、その人の姿を評価・判断をしています。

ですから、自分の心に曇りがあったり、濁りがあったりしたら、物事の正しい姿は見えないということになります。

物事を正しく見、正しく判断するためには、自分の心がきれいでなければならぬということになります。

(2) 見ること聞くこと、すべて「ええよう」(良いよう)に受け取っていく。これがまごころである。ええように受け取っていくから魂の栄養になる。さかしま心で受け取っていくと、魂を傷つけ、濁し、少しも栄養にならない。

前項(1)で述べたことは、「物事を正しく見、正しく判断するためには、自分の心がきれいになければならない」ということでした。

しかし、自分の心をいつもきれいにしておくことは容易ではありません。

天理教の教えでは、次の八つの心が「八つのほこり」(埃)としていましめられています。すなわち「をしい」(惜しい)・「ほしい」(欲しい)・「にくい」(憎い)・「かわい」(可愛い)・「うら

み」(恨み)・「はらたち」(腹立ち)・「よく」(欲)・
「こうまん」(高慢)の八つです。

これらの心の埃は、多かれ少なかれ、誰でも
持っているものではないでしょうか。とすれば、
私たちには物事が正しく見えていない可能性が
大きいことになります。

そうであれば、人を悪いと決めつけたり、批
判しようと思つたときには特に、それは正しく
ないかも知れないと思う謙虚さを持つことが大
事ではないでしょうか。

「たまたま気がつかなくつたんだらう」、「そう



せざるを得ない何か訳があつたんだらう」と、
あるいは廊下を走りまわる子供には「元気だね」
と、あたたかい、思いやりの気持ちで見えてあげ
る。つまりその人にとって不利でないように、
有利なように、すなわちその人に「ええ(良い)
ように」受け止めてあげるといふことです。

そうすれば私の気持ちも汚さなくてすみます
し、傷つかないし、むしろ私の心は、丸く、豊
かになるのではないのでしょうか。

(3) 私の人生行路はなかなか厳しく、死を決
心したこともあります。そうした苦行に遭
うと、迷いの心、弱い心が起きるが、それ
を思い直し、思い直しして乗り越えていく
のです。苦難というのではなくとも、人
の言葉によって心が曇ったり傷ついたりす
る。頭から下肥をかけられたこともある。

この馬糞野郎と罵倒されたこともある。その時、大根でも肥をかけられたら太る、これで私の魂も太って有り難いと思う。馬糞(を) やろう(野郎)とおっしゃれば、喜んでいただきます、そしてジャガイモの肥料に置いて帰りますと言う。きつい言葉をかけられると、よく励ましてくださって有り難うと感謝する。

生活していく中には、苦労や困難に出合ったり、人からいやな言葉を浴びせられたりということは少なくありません。そういう時にどう対処するかということは、人生の要諦(ようてい)の一つと言えるでしょう。

下肥をかけられても、「大根が太るように私の魂も太って有り難いと思う」、きつい言葉をかけられたら、「励まして下さって有り難うと感謝する」というのが出居清太郎先生の対処法でした。

苦労や困難に出合ったり、いやな言葉を浴びせられたりすると、気が滅入って元気をなくし、グチャやうらみ言を言ったりするのが普通でしょう。その時に、これによって自分が鍛えられる、成長できるのだから有り難い、と受けとる。

つまり、自分を元気づけるように、自分の成長に良いように受け止めることが自分の心に栄養を与え、心を豊かにしてくれるのではないのでしょうか。

大きな失敗や困難にはそうそう出合うものではありませんが(下肥をかけられるなど、現代では考えられません)、小さなことなら日常茶飯事です。ホームを駆け下りたのに、寸前でドアが閉まって乗れなかった。その時に、チクシヨウ、途中で寄ったコンビニの店員がモタモタしなかったら乗れたのにあの店員メ、と思うなら、あの電車には乗らなかつた方がよかつたんだ、乗ってたら何かトラブルに出合っていたかもしれ

ない、と思う方が心の健康にいいでしょう。その電車に乗れたとして、トラブルに出合ったかどうかはわかりませんが、出合わなかったという証明もできないことですから。

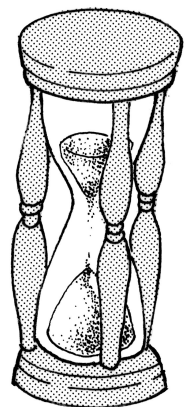
(4) 上げ潮にのって大きさまぎまの石が浜辺に打ち上げられる。ところが、引き潮が来ると、小さい石は、わけもなく波にのまれて流されてしまう。人は誰しも上げ潮のりと調子づき、成功したように思うが、常日頃の徳の積み方が足りないと、いざという時に臨んで、あっけなく流される場合が多い。人の重さは体重によって定まるのではない。徳の大小がその人の真正味の重さを決める。

何かのちよつとしたことがきっかけとなって

マスコミで取り上げられ、一時期もてはやされるけれども、長続きしないで、すぐに表舞台から消えてしまう、といったことが芸能界ではよくあるようです。

芸能界とはいわなくても、一般の生活の中でも、思いがけず成功するということはあります。そのとき有頂天になって、うぬぼれて、なすべき努力もしないようでは、いったん逆境になった時には、友達も誰も寄りつかないという悲惨なことになるでしょう。

「常緑樹が、常緑樹であることがわかるのは、冬になってからだ」という言葉を聞いたことが



あります。夏の間は、常緑樹も落葉樹ともに葉をつけていますので、見た目に区別はつきません。冬になると常緑樹であることがはっきりします。逆境のときにこそその人の真価が問われるということでしょう。真正味の重さが問われるということでしょう。

あたたかい、思いやりの心をもって人に接し、自分のなすべき務めを誠実に、陰ひなたなく行うということの積み重ね、そして、人々から信頼され敬愛されるということが徳を積むということと言っていると思います。

徳を積むことは容易ではありませんが、何事も「ええように受け取る」ということによつて養われた心がその基になるのではないのでしょうか。

(5) 私は二十代の頃に、怒った顔や不平不満

にふくれた顔を人に見せないようにしたいと願った。そこで工夫して、小鏡を一枚いつも帯の間にはさんでおき、腹が立ったとき、あるいは嫉妬心を起こしたときに自分の顔を見ることにした。見て、わが顔の醜さに驚いた。人の怒った顔はいつも見ており、見よいものではないと思っていたが、自分の怒った表情はそれ以上に醜いものであることを知った。こうしておよそ十年あまり、鏡を見て微笑をたたえる勉強に励んだ。そのうちに、いつでも、どのような場合でも、微笑を失わぬようになれた。皆さんは、「先生はいつもにこやかにしておいでになる」という。たしかに私はほほえみを失わない。しかしこのほほえみ、一朝一夕に生まれたものではない。十年あまりの、うまず、たゆまざる精進努力の結晶である。

編集後記

「笑う門には福来たる」は、人口（じんこう）に膾炙（かいしゃ）（かいしゃ）された言葉です。笑うことの、健康への好影響が科学的に証明されているとも聞きます。

笑うことは、面白いとき、愉快なときにはできませんが、辛い時、苦しいときにはできません。しかし、辛い時、苦しいときにも、ほほえむことはできます。

ほほえむ心は、すべてを受け入れ、あたたかく、やさしく、あきらめず、強靱（きょうじん）な、そんな心のように思われます。それは、すべてを「ええように受け取る」心でもあるのではないでしょうか。

今年の初めには、雪国ばかりでなく、各地で記録的な大雪がありました。夏には、「これまで経験したことのない」大雨が降った地域が何か所もあり、大きな被害が出ました。自然には、私たちがいまだ知り得ていない世界があることを改めて認識させられました。

人の心の世界にも、未知の部分が多くあります。しかしそれらもすべて、確かな秩序の中にあるということ、出居清太郎先生は教えてくださっています。

その秩序を、自分の体験を通して少しずつでも認識できたらすばらしいと思います。

次号は来年 3 月 1 日発行です。（H・Y）

平成 26 年 10 月 1 日 ふゆのあり 658 号付録 ぷらす α 平成 26 年秋号（通巻 99 号） 編集・発行人 山本博也
発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町 3-11-1 修養団捧誠会青少年担当 TEL 03-3971-1493